藤野恒三郎氏逝く

長門谷　洋　治

藤野恒三郎（ふじのつねさぶろう　一九〇七～一九九二）氏は、約七カ月の病臥のあと、吹田市の阪大微研病院で平成四年八月十五日早暁、胃癌で死亡された。八十五歳であった。

九一年十一月十七日（日）に阪大病院で行われた日本医史学会関西支部秋季大会（医学史研究会と共催）で挨拶にたたれた氏は「学会に出るときにはやはり演題も出さないと……」という出だしのもと、氏独特の口調・展開によるいつもと変わらぬ端正な姿で、聴衆を惹きつけられた。その前、同年七月二十一日の岐阜県の内藤記念くすり博物館における当支部春季大会（医学切手友の会関西支部と共催）では晩年の最大のテーマとされた〝『蘭学事始』と解体新書扉絵〟について述べて下さった。（その内容の一部は「医学史の中の謎　二題（続）――解体新書の扉絵・アダムとエバ――」『適塾』24号、一九九一年に登載）

藤野恒三郎氏

☆

藤野氏は福井県の代々の医家の家に生まれ、武生中学を経て、大阪医科大学（現、大阪大学医学部）を一九三一年に卒業、中国・ビルマ・タイの三国に通算約五年間、軍医として従軍されたほかは大阪を拠点とされた。氏が得られた多くの賞の中に大阪文化賞というのがある

のがそのことを端的に象徴している。

藤野氏の業績の最大のものが腸炎ビブリオの発見であることは申すまでもないが、この発端は一九五〇年(昭和二十五年)十月二十一日に大阪市の南部から岸和田市にかけて発生した「シラス中毒事件」である。ちなみにこの事件が朝日新聞に報じられたのは二十三日、藤野氏のもとへ問題のシラスが持込まれたのも同日であったが、氏は三日後の二十六日には早くも腸炎ビブリオ(当初は別名)を発見している。細菌学者としての藤野氏については、語られるにふさわしい多くの人がおられるが、腸炎ビブリオについては氏自らが記された「腸炎ビブリオ」(『臨床科学』23巻11号、一九九一)が詳しい。氏が亡くなられる二日前の朝日新聞・大阪版・家庭欄にも「腸炎ビブリオ菌　繁殖の季節　食中毒にご用心」の記事があり、腸炎ビブリオの名は今や市民にも耳なれたものとなっている。

☆

氏の歴史的な関心はダ・ヴィンチやミケランジェロに発する壮大なものであったが、そのテーマの一に大阪の医学史、大阪細菌学史があった。中でも力を入れられたのが適塾の歴史であった。一時は崩れかかっていた適塾が、大阪のみならずわが国でも屈指の蘭学史・医学史上の遺構として公開されるに至った(一九八〇年)原動力は藤野氏にあったといっても過言ではない。氏はその祖父(藤野升八郎)が適塾の門下生という特別のきずながあった。

そして氏は洪庵の曽孫・緒方富雄氏とも差しで話しあうことができ、『緒方洪庵のてがみ』(菜根出版)の出版にも協力された。種痘史に関心をもたれたのも、種痘事業の推薦者でもあった洪庵に触発されたところ少なくとしないであろう。氏の医史学者としての資質は同じ微研の教授であった加藤四郎氏のジェンナー研究などに受け継がれている。藤野氏は一九八三年より本九二年まで大阪大学医学部同窓会である学友会の理事長をつとめられ、医学部の大阪市より吹田市への移転に伴なう新学友会館の建設についても尽瘁せられたと洩れ聞く。

氏の父の弟、藤野厳九郎は東北大学医学部の前身、仙台医学専門学校の解剖学の教授であったが、その名は魯迅の「藤

野先生」で知られる。氏が学者として立つ土壌は早くより準備されていたともいえる。

☆

氏は昭和四十年頃、胃癌ということで胃の三分の二の切除を受けられた。幸いにもこれは胃潰瘍であった。氏の労作『藤野・日本細菌学史』（近代出版・一九八四年）などはいずれもその後の成果である。しかし二度の奇跡はついにおきなかった。

（大阪市）